平成28年9月19日（月）
日本特殊教育学会（新潟大会）

国立特別支援教育総合研究所
平成28年度　基幹研究
知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程編成の在り方

―アクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・方法・学習評価の一体化―（平成27～28年度）

自主シンポジウム資料

研究の背景

新しい時代にふさわしい学習指導要領の在り方についての検討が進んでいる

【次期学習指導要領改訂に向けた動き】

・「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―」（2014）

・「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（2014）

・「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」（2015）

・「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」（2016.8.26）

【先行研究】

・H25-26専門研究B「知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究」を踏まえて

※学習指導要領が大きく変わろうとしているこの時期に、新しい考え方に基づいて、学校における教育課程編成の在り方を検討していく必要がある。

今後、学校における教育課程編成を考える上で重要となるキーワード

- 育成を目指す資質・能力
- アクティブ・ラーニング
- 学習評価の充実
- カリキュラム・マネジメント

研究の目的と意義

〇本研究では、育成すべき資質・能力の考え方や、それを実現するための指導方法とされるアクティブ・ラーニングの実践に焦点を当て、新しい時代に必要となる「育成を目指す資質・能力」を踏まえた目標・内容・方法・学習評価の一体化を意識した、知的障害教育（特別支援学校）における学校の教育課程編成の在り方について検討する。

〇新しい考え方のもとで学校における教育課程編成に参考になる事例や要素、概念図などが提供されることで、特別支援学校において、新しい時代に必要な知的障害教育としての「育成を目指す資質・能力」を育む指導が明確になり、特別支援学校における教育課程が教育目標に沿って組織的に行われることにつながる。

研究構造図

知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程編成の在り方
ーアクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・学習評価の一体化ー

研究1：知的障害教育における「今後育成すべき資質・能力」についての具体的検討

目的：具体像を示す
方法：
・キーコンピテンシーのまとめ
・庄原特別支援学校の分析
・海外の情報

研究2：知的障害教育分野でのアクティブ・ラーニングの成果と課題の検討

目的：知的障害分野での実際を探る。
方法：文献研究、及び研究協力校からアクティブ・ラーニングの実践事例の収集と分析。

研究3：知的障害教育における教育目標と内容・指導方法、学習評価が一体的につながりを持つための工夫の検討

目的：一体的につながりを持つために必要な要素やシステムの検討。
方法：文献研究、及び研究協力校における取組からの情報収集と分析。全知長情報交換資料のアンケート結果

(a)育てたい力
(b)何を学ぶか
(a)～(b)
のつながり

(b)何を学ぶか
(c)どのように学ぶか
(d)学習評価の充実
(b)～(c)
のつながり
(c)～(d)
のつながり

(a)～(d)
のつながり

教育課程編成のモデル図の完成

知的障害教育における「育成すべき資質・能力」の視点を踏まえたカリキュラム・マネジメント

※(a)(b)(c)(d)は、育成すべき資質・能力を踏まえた知的障害教育における一体的な教育課程編成の構造図（仮説）を参照

研究の成果とまとめ

①知的障害教育における新しい時代に必要となる育成すべき資質・能力についての具体像を示す。

②知的障害教育における目標・内容・方法・学習評価を一体としたアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践事例と在り方を示す。

③新しい時代に必要となる「育成すべき資質・能力」の視点を踏まえた教育目標と内容・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた知的障害教育における教育課程編成の工夫点を考察する。

④育成すべき資質・能力を踏まえた知的障害教育における一体的な教育課程編成の構造図を作成する。

育成を目指す資質・能力を踏まえた知的障害教育における一体的な教育課程編成の構造図（仮説）

（a）育てたい力

学校教育目標（目指す児童・生徒像、各学校における育てたい力・付けたい力など）

育てたい力の理想

・育成すべき資質・能力を踏まえた学校教育目標（育てたい力）の見直し

つながりの理想

・教科部会
・教育課程委員会

（b）何を学ぶか

・各教科
・学校設定教科

各教科等の目標・内容を見直す要素

・学習指導要領との関連
・育てたい力
・生活年齢
・発達段階
・一貫性
・系統性

つながりの理想

・年間指導計画
・学習指導案（略案）
・評価計画（観点、評価規準、方法）
・授業計画（支援、教材教具、環境）

（c）どのように学ぶか

・アクティブラーニング

課題の発見・解決に向けた主体的な学び

・深い学び
・対話的な学び
・主体的な学び

つながりの理想

（d）学習評価の充実

アクティブ・ラーニングの評価

※本図は、これまで知的障害教育で行われてきた取組を基に重要と思われる各要素を整理するとともに、アクティブ・ラーニングによる授業改善の視点を踏まえた学習活動に焦点を当て、教育目標と内容・指導方法、学習評価を一体として捉えた学校による教育課程編成における全体像をイメージしている。

研究①　１年目の成果と2年目の取組

知的障害教育における新しい時代に必要となる育成すべき資質・能力についての検討

関連文献の概観

・OECDのキー・コンピテンシー
・北米を中心とするATC21プロジェクトが提唱している21世紀型スキル

知的障害教育における育成すべき資質・能力の具体例に関する検討

・OECDのキー・コンピテンシーの各定義を「新しい時代に求められている資質・能力」の重要構成要素として着目し、研究協力校の１事例について分析を行った。

他国の情報（イギリスにおける育成すべき力の捉え）

・イギリスのナショナルカリキュラムでは、思考スキル、キースキル、社会性・倫理・精神のコンピテンシーの3つの力を、カリキュラムを横断して行うとされている。
・キースキルを、知的障害のある子供に関するガイドブックで、キー・ファンクションスキルと学習のためのスキルに分けて内容を示すなど、学習への対応を工夫している。

・知的障害のある子供に対しても、原初的レベル、あるいは初歩レベルの内容を含めれば、キー・コンピテンシーのような汎用的な能力をすでに指導で取り扱っており、またそのような指導内容を扱うことが可能であることが分かった。
・イギリスのファンクションスキルの内容等を参考に、知的障害教育における資質・能力の具体的な指導内容（案）を明らかにしていくこと。

広島県立庄原特別支援学校の単元系統表（単一学級版）の内、生活単元学習に関わる単元目標と「キー・コンピテンシー（OECD）」の分類対応例（代表例のみ）

		単元目標　高等部					
小カテゴリ	左記の説明・定義	学校の仕組み	保健体育	進路学習	防災教育	社会の仕組み	備考
A:言語、シンボル、テクストを相互作用的に活用する能力	・　様々な状況において、話したり書いたりする言語のスキルや数学的なスキル等を効果的に活用する力。【PISA調査・読解力、数学的リテラシー】	☆目的や意図などに応じて生徒総会資料内の文章の概要や要点などを適切に読み取ることができる。（国2(3)）【学校の仕組み】		☆ようこそ先輩やJSTの授業などで話の内容の要点を落とさないように聞き取ることができる。（国1(1)）【進路学習】		・宿泊学習に向けて金銭や時計・暦などの正しい使い方を理解することができる。（数1(4)）	データの一致率学校の仕組み＝73.4%
B:知識や情報を活用する能力	・　情報それ自体の本質について、例えば、その技術的なよりどころや社会的・文化的な文脈などを考慮して、批判的に深く考えることができる力。【PISA調査・科学的リテラシー】 ・　他人の意見や選択肢の理解、自らの意見の形成、意思決定、確実な情報に基づいた責任ある行動を可能とする基盤。	（高校生活） ☆学校内にはいろいろなきまりがあることを知り，それらを適切に守ることができる。（社1(2)道徳，人権）【学校の仕組み】				（秋のウォーキング②） ☆ウォーキングを通して心身の発育・発達に応じた適切な行動や生活に必要な健康・安全に関する事柄の理解を深めることができる。（保2(3)道徳，人権）	データの一致率保健体育＝71.4%
C:テクノロジーを活用する能力	・　個人が日々の生活においてテクノロジーが新しい方法で活用できることに気付くことが第一。 ・　テクノロジーには、遠隔地間の協働、情報へのアクセス、他人との双方向のやりとりなど新たな可能性。そのためには、E-mailの送信など単なるインターネットの活用スキル以上の力が必要。					☆修学旅行のしおり作成時などにコンピュータなどの情報機器を利用した情報の収集，処理及び発信の方法が分かり，実際に活用することができる。（情2(4)）	データの一致率進路学習（キャリア）＝63．5%

研究②　１年目の成果と2年目の取組

知的障害教育におけるアクティブ・ラーニングの検討

関連文献の概観

・大学教育における学習プロセスについての問題提起からその解決法の一つとして提唱されてきた。
・一方的な知識伝達を行うのではなく、学習を行う者が様々な学習形態の中で協働しながら、主体的に学習内容を獲得する学習様式である。

研究協力機関からの情報収集

・研究協力機関で取り組まれているアクティブ・ラーニングの具体的な実践の状況や成果と課題について具体的な実践を通じて分析・検討し、知的障害教育のモデルを示す。

・千葉県立特別支援学校流山高等学園　（社会、家庭科の実践から）
・広島県立庄原特別支援学校　（作業学習の実践から）
・愛媛大学教育学部附属特別支援学校　（生活単元学習の実践から）
・長崎県立鶴南特別支援学校　（生活単元学習の実践から）
・鹿児島大学教育学部附属特別支援学校　（国語、算数・数学の実践から）

アクティブ・ラーニングに対する指導方法の不断の見直しの視点をもとに、授業実践の成果をまとめるとともに、今後の課題を明確にする。

中間報告書のまとめから
（鹿児島大附属特別支援学校の実践）

- 国語科における基礎的・基本的な知識や内容を学習するとともに、作文の採点表に従って自分や友達の書いた作文を評価することで、他者にわかりやすい作文を書くために必要なことを子供たち自身が考えて問題や課題を発見し解決できるようにされていた。
- 友達とペアになって作文を評価することで対話を通して協働で課題に取り組み内容が設定されていた。
- 作文のテーマや内容といった作文の構想、漢字の習得を図るための国語辞典の活用、評価表による完成した作文の評価といった、子供たち自身が主体的に考えて能動的に学習する内容が取り入れられていた。

研究③　１年目の成果と2年目の取組

知的障害教育における教育目標と内容・指導方法、学習評価が一体的につながりを持つための工夫の検討

関連文献によるカリキュラム・マネジメントの情報収集

カリキュラム・マネジメントには、以下の2つの側面がある。

・教育活動の側面・・・・学校教育目標を実現するために、教育課程を編成し、その教育課程を計画・実施・評価して、と回していくこと。

・経営活動の側面・・・・相互関係を全体的・総合的に把握し、カリキュラムをヒト・モノ・カネ・情報・時間など経営資源との関連で捉える発想。

全知長の情報交換アンケート及び研究協力機関の取組から

・特別支援学校（知的障害）では、独自の工夫を凝らしたカリキュラム・マネジメントを実施している。**これからすべての学校で求められるポイントを整理する。**

・授業改善には意識が及んでいるものの、年間指導計画など長期的なスパンでの見直しや、年度途中の年間指導計画の見直しなど、より大きなスパンでの計画全体の柔軟な**見直しの事例を取り上げる。**

特別支援学校（知的障害）では、児童生徒の障害の状態や学習上の特性などから、創意工夫を凝らした教育課程の編成に努める必要があり、教員一人一人が「カリキュラム・マネジメント」の捉えを意識できるようにしていくことが重要になる。そのためにも、育成を目指す資質・能力を踏まえた知的障害教育における目標・内容・方法・学習評価を一体的に行う学校による教育課程編成の在り方についてさらに検討を深めていく必要がある。

今年度の研究

・新しい時代に必要な育成を目指す資質・能力について、知的障害教育における捉え方を検討する上で参考になる他国（イギリス）の情報収集・分析。

・中教審での育成を目指す資質・能力のまとめを参考にした、知的障害教育における資質・能力の具体的な指導目標・内容（案）の作成。

・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業における単元計画作成段階の取組、及び学習評価の実際について、研究協力機関の実践事例からの情報収集と分析を行い、考え方や展開の工夫を示す。

・育成を目指す資質・能力を踏まえた知的障害教育における目標・内容・方法・学習評価を一体的に行う学校による教育課程編成の在り方について、教育課程編成の構造図をもとに研究協力機関から情報収集し分析する。

・育成すべき資質・能力を踏まえた知的障害教育における一体的な教育課程編成の構造図（仮説）の内容をさらに深める。